

扇田昭彦

「唐党」による「唐党」のための……

劇団唐組を率いる
劇作家・演出家・俳優の唐十郎は七十二歳の現在も精力的な活動を続けている。

四月末からは新作『海星』を唐組で上演するし、劇団唐ゼミと新宿梁山泊にも新作を書き下ろした。

先日、唐と渡辺えりがそれぞれ自作の戯曲を朗読する催し『自作自演』が東京で行われたが、唐の名作『少女仮面』のリーダーイングと歌（劇中歌を歌った）には強いカリスマ性があった。



『唐十郎論 逆襲する言葉と肉体』
樋口良澄
未知谷 2000円

そんな唐演劇の軌跡を論じたのが、樋口良澄氏の『唐十郎論 逆襲する言葉と肉体』である。

樋口氏（一九五五年生まれ）は思潮社、河出書房新社を経て、今は岩波書店の編集者。情熱的な唐十郎ファンで、長年の観劇体験と唐との親交を踏まえて書き下ろしたのがこの本だ。

初期の状況劇場の時代、唐と寺山修司の関係、テント空間など、論点は多岐にわたるが、私が感心したのは二〇〇〇年以降の唐の比較的新しい劇作活動を論じた後半の章だ。

近年、唐が劇の舞台とするのがもっぱら製糸工場、漁港、製陶工場、介護、商店街、ラーメン屋、豆腐屋など、「肉体を使う労働の現場」だという指摘は的確だ。そして現在の唐は「小工場や小さな商店、飲食店、職人や商人の世界」を「現代日本の主戦場」として、「情報化社会の中で、排除されようとする（も）の神話性」を描いていると論じる。奔放な「幻想」や複雑

な「劇構造」を軸に語られがちだった唐の劇に対する新しい刺激的なアプローチだ。

唐の演劇はしばしば観る者を病みつきにする。そんな熱い唐十郎ファンのためのマニアックな本も刊行された。鶴屋南北戯曲賞受賞作『泥人魚』や『紙芝居の絵の町で』『行商人ネモ』など唐組で上演された代表的な戯曲十五本を取めた『唐組熱狂集 成』（ジョルダンブックス、一万二千円）だ。唐組の紅テントを思わせる赤い箱入りの、合わせて千ページを超える二冊本。出版不況の中で、こんな豪華本が出るころにも唐の衰えぬ人気がある。